



# 家族そろって、農業塾

「うわ〜っ、あそこにおたまじゃくし！」「ここにも、めっちゃ、たくさ〜ん！」日曜の甲山農地に子どもたちの歓声が響く。二週間前に「代かき」を行った田んぼは、蛙、いもり等、生き物のすみかになっていた。そして待ち望んだ「田植え」の日。説明を受けた後、皆、裸足になり、おそろおそろ…ぬるっとした泥の中に入る。ゆるゆるとした地面に足元をとられ、よろけそうになったり、水の冷たさに、大人も子どもも大歓声。そして全員で一列、息を合わせ、一歩ずつ後方へ進み進み、苗を植え、なんとか終了！しかし、細く柔らかい苗はちゃんと根づいたかなと、帰宅後も心配になる。そして二週間後…。苗はより緑に、たくましく背筋を張り、成長していた。「生命はそんなに弱くないんだよ」とつぶやいているようだった。

これは、「甲山農業塾」のほんのひとコマ。「甲山農業塾」とは、NPO法人子ども環境活動支援協会が、地元農家さんと共に、素人の私たちに一年間、農業を教えてください、その名の通りの「塾」である。春、開校式でスタート。早速、夏野菜の苗を植える。夏到来、灼熱の太陽の下、香り・色共に濃い野菜を収穫。直後に、冬野菜の種や苗を植えていく。常に、雑草や無農薬栽培ゆえの様々な害虫との闘い…。周辺の社家郷山・甲山が色づき始めた頃、稲刈り、脱穀。感謝を祈って嬉しい収穫祭。冬の到来、お正月用のしめ縄作りやとれたもち米でお餅つき。鍋物が美味しい冬野菜を収穫。堪能したら、寂しいけれど…修了式を迎えることとなる。ほぼ月に2回の活動、農業に携わる方々からは、「そんなものではないぞ」とお叱りを受けそうだけれど、普段は当たり前と思っていた四季、土、水、空気、一粒の種や苗の命、普段は見られない生物・植物の存在とその大切さを実感、そして、いろいろな面で「食」や「環境」を考える様になった。

そして何より、私たちが来るまでの間、毎日、生育状況を見守り助け、水やりや追肥を行ってくださっているNPOさん、農家さん、ボランティアさん、皆さんに深く深く感謝をしたい。

(豊嶋)



農業塾のひとコマ

# 新しい風 農ギャルたちの試み

「農ギャル」「農ガール」「山ガール」「女子会」などのことばをよく目にするようになってきました。女性が関心のある世界を楽しみ、さまざまなジャンルに関わることも珍しくなくなってきたからでしょうか。今回はそんな女性の姿のひとつ「農ギャル」を取り上げてみました。



## ■農ギャル・農ガール

食の安全、農家の高齢化、担い手不足、日本の食糧自給率40%など農業の問題を考え、農業経営に関わろうという女性たちが各地で活動し始めている。

「ギャル社長」といわれた藤田志穂さんは、ノギャルプロジェクトを立ち上げ、ギャルママ親子の農業体験ツアーを企画したり、ジーンズ会社と共同で機能的でおしゃれな作業着をつくるなど、農業と若者の架け橋にチャレンジしている。

## 編集委員フリートーク

「ノギャル」は「農業するギャル」。藤田志穂さんが秋田県大潟村で米作りを始め、収穫したお米は「シブヤ米」として出荷したそう。

「ノギャル」ということばは、2009年の流行語大賞にもノミネートされて話題にのぼったね。

小学生も、藤田志穂さんのことは知っていたので、びっくり。

モデルさんがオシャレをして農業することで、農業のイメージも変わってきたね。

オシャレは譲れないという姿勢が若い人たちに支持された半面、農作業にオシャレなんてと多少違和感を感じた世代もあるかもしれないね。

「自然相手の農業に生半可な気持ちではやっていけないよ」って気持ちもある。

モデルやカリスマ読者モデルが農業を広めることによって、彼女たちにあこがれる若い世代の人たちが、農業に関心を持つようになったのはうれしいことだね。

第一次産業の農業において、女性農業者は農業就業人口の53.5%、基幹的農業従事者の44.0%を占め、重要な役割を果たしてきました。しかしながら、認定農業者など農業経営や地域社会の意思決定の場では女性の割合は依然低い水準に留まり、経営者や代表者として農業経営の第一線に出る数はまだまだ少ないのが現状です。そんな中、「農ギャル」「農ガール」のような活動もできました。女性が参画することによって、第一次産業も好影響を受けてくるのではないのでしょうか。

日本の食料自給率や、過疎問題など、将来の食に対する問題意識も高まるかも。

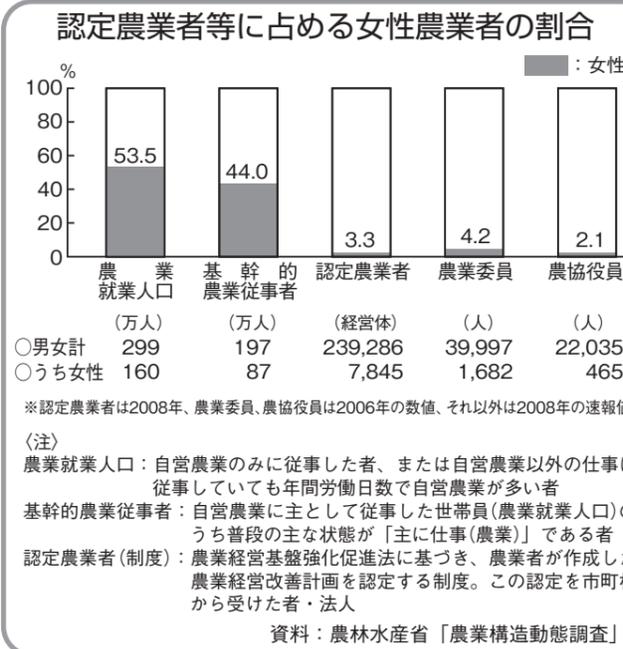
やってみただけれど、大変だからやっぱり辞めますというの、退く側も退かれる側もつらいと思う。農家の方も、活性化するのはうれしいことだけれど、持続可能かどうか不安でしょう。

自分で田んぼや畑を耕し育てた作物を収穫するまで関わる、農業で得る達成感、充実感、若い人たちにとって新鮮で、しっかりとした手ごたえを与えられているのだと思う。

学校をやめた子が、モデルに会うのを目的で農業を始めたけれど、自分が育てた野菜が売れた時の話を、嬉しそうに話す番組をみた。

将来の職業選択のきっかけになるかもしれない。

便利な生活に慣れきっている都会人が、自然の中で、違う時間の流れを感じてほしい気がする。



## 年間を通じた「農体験」に魅せられた

西宮の「甲山農業塾」は、市民の農体験活動支援事業としてNPO法人子ども環境活動支援協会が企画運営しています。このNPO法人で1年間農業塾を担当した片山翠さんにお話をうかがいました。

片山さんは大学を卒業して2年目。大学の「活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成」の授業に参加し、NPO法人子ども環境活動支援協会へ就職されたそうです。地域の農家、企業、市民、大学が力を合わせ協働事業を行う甲山農地で、スタッフの一人として活動に取り組みられました。家族・グループが週末農業体験できる年間プログラムのなかで、親子のふれあいや、普段会社で働いている父親たちが楽しく会話するなど、そこで出会った親同士が交流している姿も印象的だったそうです。

1年を通して「食」に関わることで、農業のおもしろさに加え、大変さもよくわかり、その体験を通して、「農」の恵みや生命を育む農地の大切さも感じたと語っていました。この農地ではセミナー生や卒業生などいろんな方が携わって成り立っており、多くの人が関わっていくことが本来の農業の楽しさなのではないかと感じたということです。

学生時代から環境問題に関心を持ち続けて飛び込んだ職場で、今後、地域の小学生の体験学習など「教育」に関わる仕事に取り組んでいきたいと抱負を話していただきました。これからの若い世代が自ら「農」に関わっていく姿勢に清々しさを感じられました。



▲NPO法人子ども環境活動支援協会 片山翠さん(右端)